

## 8. 災害勘は、試合勘と同じ、練習で泣いて試合で笑う

災害勘とは、災害の時期や内容などを事前に予想したり想定するというものではありません。災害が発生した時に、どのような展開になるのかを敏感にかつ正確にとらえるものです。具体的には地域にどのような影響があって、だれが被害にあう可能性があるか、要注意箇所や事項への注目というようなことに反応するものです。

このことは、起きたら何とかなるというものではなく、事前から周到に学習しておかないと即断、即決、修正、改善といったことがスムーズにならないものでもあります。

実際に災害が発生すると、何もかもが混乱・混在して何から、どうすればいいのか、普段から役割を決めていてもその人自身が被害者という中で、だれがリーダーシップをとるかが大きなことにもなります。そういう時に一人一人が災害への勘を働かすことで、情報が共有されて無駄のない確認、手順が自然と出来上がってくるのが災害勘によるものです。

東日本大震災でも、事後の報告を見ると、集落ごとにその成果の違いを読み取れるようです。簡単に言ってみれば、リーダーがいて、リーダーの動きを住民が理解して行動したところは無駄のない動きで被害者が出なかったといわれています。つまり、リーダーのうしろ姿を追うことは災害勘がなせるものであると思います。

以上のことは、実は災害に限らずに新しいことへ挑戦するときに行われる構想プロセスであると思います。災害勘を身に着けるためには、何をどうすればいいのかではなく、普段の中でこのプロセスを意識して試みることをしていれば、急な災害時にも応用ができるものです。もちろんその時の基本は正しい情報を収集して分析評価するということがあります。その成果は、毎年行われることが多い防災訓練の時に試してみるとよいと思います。例えば、模擬避難所での実践に近い形での運営を試してみるのもお勧めです。そして、手順の確認、役割などを経験して、問題点を洗い出して解決策を話し合うというのが有効だと思います。

そして、最も大事なことは、継続して関心を持ち続けていくことではないかと思っています。確かに、自然災害は突然発生するのかもしれませんが、様々機会をとらえながら、多くの経験や知識を知ることが欠かせないと思います。災害事例を対岸の火事だと思わずに、意識しておくことの大切さを忘れないことが、まず災害勘を醸成する一歩です。

加えて、災害勘を養うには、過去の経験に学ぶこと、特に経験者からの語りは有効です。もちろん過去と同じことが起きるとは限らないにしても、実際にどう行動したのか、問題点はなかったのか、発生して初めて気が付いたことはなかったのかなど、語り部が話されることは大変重要なことです。

こうしてみると、災害勘というのは災害に対して客観的情報を整理して行動を起こすことで、難しく言えば、リスクを特定して、最小化するためのプロセスを構想していくことであると思います。自然災害は時間とともに刻々と状況が変わっていきますので、気が抜けないものであることを頭に入れておくこともよいと思います。そうすることで、思いがけなく有効な情報を入手することもあるって、防衛力が堅固になっていくのではないのでしょうか。